

ポルトガル語史授業メモ

黒澤 直俊

基本文献 (特に最近のもの)

- 1) Castro, Ivo (2006). *Introdução à História do Português. Segunda edição revista e muito ampliada.* 242 pgs. Lisboa: Edições Colibri.
- 2) Teyssier, Paul (1984). *História da língua portuguesa.* 113 pgs.
Tradução de Celso Cunha. Lisboa: Livraria Sá da Costa Editora.
(Título original: *Histoire de la langue portugaise.* «Que sais-je?» n° 1864. Paris: PUF. 1980.)
- 3) Cardeira, Esperança (2006). O Essencial sobre a História do Português. 106pgs. Lisboa: Caminho.
- 4) Baldinger, Kurt (1972). *La formación de los dominios lingüísticos en la península ibérica.*
Versión española de Emilio Lledó y Montserrat Macau. Segunda edición corregida
y muy aumentada. Madrid: Editorial Gredos.
- 5) Azevedo, Milton M. (2005). *Portuguese. A Linguistic Introduction.* Cambridge University Press.

用語とポイント

- ・ ポルトガル語の系統と分布
インド・ヨーロッパ語, ラテン語, 俗ラテン語, ロマンズ諸語, イベロ・ロマンズ諸語
印欧語比較言語学の成立, 言語学における比較, 対照, 類型論
語族, 語派, 諸語
言語の分類について: 系統, 類型, 地理
- ・ “História externa da língua” と “Evolução linguística interna”
レコンキスタ, イベリア半島のローマ化
- ・ 始まりと終わり, 一 文献以前と初出文献, そして時代区分
- ・ 時間の軸はしばしば空間の軸に投影される
方言の研究はとても重要である.
語史上の時代区分とレコンキスタの進展や言語的中心の移動

I. ポルトガル語の分布

- ・ポルトガル共和国 Portugal (88944km², 92074km² com os Açores e a Madeira, 1006,6 万人)
- ・ブラジル連邦共和国 Brasil (8511996km², 17446,8 万人)

実質的には唯一の言語といわれるが？

Portugal → 東北部にミランダ語地域 mirandês, guadramilês, rionorês
(トラズジュモンテシュ Trás-os-Montes 地方ブラガンサ Bragança 県)

国境沿いのスペイン側地域にもポルトガル語の飛び地があった

Brasil → 南米インディアン諸語の話し手が21万5千人(十数万人という数もある), 190 言語

PALOP (= Países Africanos de Língua Oficial Portuguesa ポルトガル語公用語アフリカ諸国)

- ・カーボヴェルデ共和国 Cabo Verde (4033km², 40 万人, 2 言語)
- ・ギニアビサウ共和国 Guiné-Bissau (36125km², 131 万人, 20 言語)
- ・サントメ・プリンシペ民主共和国 São Tomé e Príncipe (964km², 16 万人, 4 言語)
- ・アンゴラ共和国 Angola (1246700km², 1036 万人, 40 言語)
- ・モザンビーク共和国 Moçambique (799380km², 1937 万人, 38 言語)
(言語数などについては SIL のホームページ <http://www.ethnologue.com/>などが便利)

- ・東チモール民主共和国 Timor Lorosae (78 万人, 19 言語)

CPLP (= Comunidade dos Países de Língua Portuguesa ポルトガル語諸国共同体)

アフリカ諸国でクレオール語が存在するのは？

Cabo Verde, Guiné-Bissau, São Tomé e Príncipe
língua oficial (公用語) と línguas nacionais (民族語, 国語)

ポルトガル移民の存在

Europa (França, Alemanha, Luxemburgo...)
北米 Estados Unidos da América, Canadá (アソーレスの方言に近い)
República da África do Sul (マデイラの方言に近い)

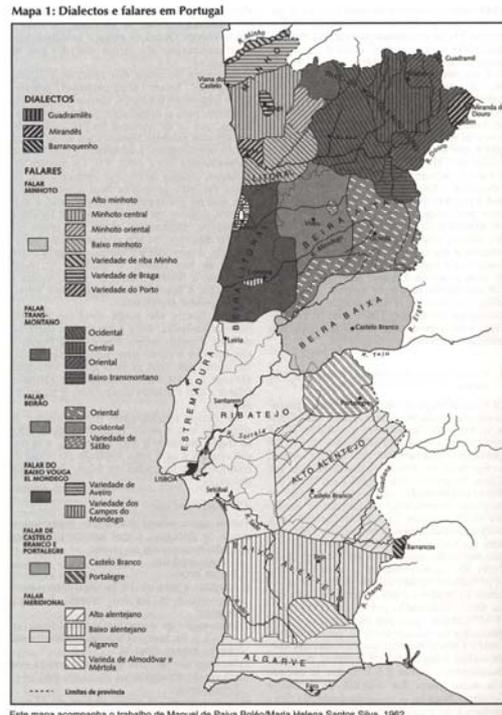
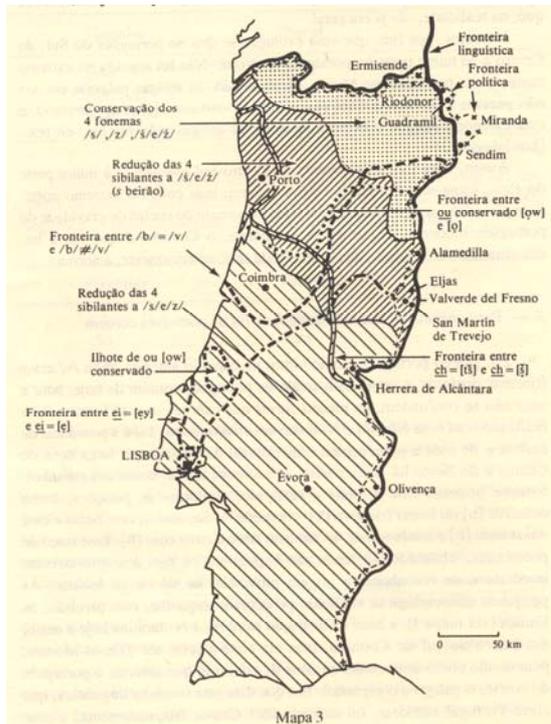
日本国内の日系ブラジル人 (約 30 万人弱)



II. ポルトガル語の規範と方言

ポルトガル：北部諸方言と中南部諸方言に大きく大別される。規範とされるポルトガルのポルトガル語はリスボンからコインブラにかけてのあたりの沿岸部方言を基礎とした教養語。

(J.Leite de Vasconcellos(1858-1941), Manuel de Paiva Boléo(1904-1992), Luís Filipe Lindley Cintra (1925-1991)などがこの分野の研究で有名.)



ブラジル： 地域的方言の設定は難しいと言われている。ブラジルのポルトガル語の規範はリオ・デ・ジャネイロ，サンパウロあたりの中南部地域の大都市のある程度教育を受けた中産階級の人々がやや改まった場面で用いる言葉遣いと規定されるが，社会的言語差が激しくかなり複雑な状況を呈している。（規範的ポルトガル語と民衆ポルトガル語）

Novela や映画などで用いられるポルトガル語は，ある種のフィクションである。

ブラジル全土に関わる分類としては Antenor Nascentes (1886-1972) がブラジルの諸方言を大きく2つに分けたことがよく引用される：

- 1) 強勢前の母音の音価（ブラジルではこの位置で開音と閉音の音韻対立はない）

pègar [pe'gar]: pegar [pe'gar], còrrer [ko'rer]: correr [ko'rer]
 (北部方言：南部方言)

- 2) イントネーションのちがいが（北部方言は抑揚が激しい）

両地域の境界は， Mucuri 川の河口から Espírito Santo と Bahia の間を抜け Mato Grosso 市



まで至る線が大体これにあたるという。

III. ポルトガル語史の時代区分

Propostas de periodização da língua portuguesa

Época	Leite de Vasconcelos	Serafim Silva Neto	Pilar Vquez. Cuesta	Lindley Cintra
até s. IX (882)	pré-histórico	pré-histórico	pré-literário	pré-literário
até 1200 (1214-1216)	proto-histórico	proto-histórico		
até 1385-1420	português arcaico	trovadoresco	gal.-português	port. antigo
até 1536-1550		port. comum	port. pré-cláss.	port. médio
até séc. XVIII	português moderno	port. moderno	port. clássico	port. clássico
até séc. XIX-XX			port. moderno	port. moderno

IV. ラテン語からロマンス語へ

イベリア半島のローマ化

紀元前218年 ローマの上陸（第2次ポエニ戦争）

紀元前209年 カルタゴが滅ぼされ、半島のローマ化が開始される

→ ラテン語がもたらされる

Hispania ulterior（下ヒスパニア）と Hispania citerior（上ヒスパニア）

紀元前27年 Augustus は Hispania ulterior を Lusitania と Baetica に分けた

Douro 側より北の地域は Gallaecia と呼ばれていたがこれは

tarraconensis, すなわち Hispania citerior といつしよにされた

（tarraconensis は Tarraco から）

Provincia は Coventus という行政単位に分かれた

→ Lucus Augustus (Lugo), Bracara (Braga), Scalabis (Santarém),
Pax Augusta (Beja)

この4つの Coventus は後のガリシア・ポルトガル語の言語領域とほぼ一致している

紀元前後に半島のローマ化はほぼ完成される。特に、北部より南部が先進地域であった。Seneca（コルドバ生まれ）などのローマの著名な文化人が輩出していることから、当時のイベリア半島の文化水準は低くなかったことがうかがわれる。また、ローマ式の教育システムはガリアでは4世紀に消滅してしまうが、イベリア半島では8世紀まで維持されていたという。この事実は、モサラベ諸語との関連で重要であるとされる。

ローマがやって来る前のイベリア半島は？

非印欧語であるバスク語の存在や半島各地に残る碑文などからイベリア語などと呼ばれている非印欧語の存在や、印欧語に属するケルト語を話す人々がいたことが知られている。イベリア半島は銅などの鉱物資源が豊かで、古代にはフェニキアの植民市などもあったらしい。

Hispania < フェニキア語の(?) isephanim “terra de coelhos”

← i- (ilha, costa) + -sephan- (coelho) + -im (pl.)

バスク語起源と思われる語

veiga (b. ibai, cas. vega) “planície fertil e cultivada”

esquerdo (b. esker, cas. izquierdo, cat. esquerre)

cama (b. kame, arag. /kama/) “leito de pastores”

紀元前 10 世紀から 6 世紀あたりにかけてケルト族が半島に渡来した。(ケルトイベリアと呼ばれる.) -briga に終わる地名, 論者によっては cl-, pl-, fl- の破擦音化や語末母音の強勢母音に対するメタフォニーをケルト基層に考えるものもいる。

基層 substratum と上層 superstrato

イベリア半島における非印欧語基層と印欧語基層

ローマ化以前の半島の言語状態を推定するには？

半島の全域ではないにしても、紀元前3世紀間にわたると思われるローマ以前の碑文が存在する。

1) イベリア文字によるもの: 左から右に書かれた500ほどの碑文

2) トウルデタン文字(escritura turdetana): イベリア文字の変種で、右から左に書かれる。

3) リビア・フェニキア文字(libio-fenicia): 未解読。

4) アルガルベ文字(碑文): 右から左に書かれたもので、フェニキア起源の文字といわれているが、音価はよく知られていない。

5) ギリシャ語, ラテン語の碑文

このうち解読されている、イベリア文字による碑文は二つのまったく異なった言語を表わし、一つはピレネーから沿岸地域にかけての非印欧語(イベリア語)で、もう一方は内陸部の印欧語(ケルト語)である。

→ 後者をケルト・イベリアと呼ぶ。

これを支持する以下の地名要素がある。

・イベリア語の Ilti-, Iltu- (lat. Ili-, Ilu-)

Iltirta / Ilerda (Lérida), Ilturo/ Iluro (Mataró, juntoa Barcelona), Ilici (Elche)

・ケルト語の -briga

Conimbriga (Coimbra), Laccobriga (Lagos)



IE *bhergh- ‘altus’ : Skt.brhant- ‘thick, strong, big, high’, Gaul. Brig-, Mlr. br± ‘hill’, OHG berg

ただし、碑文資料は半島西北部に関しては多く欠如している。

人名の研究 (Pintamus, Clutamus, Tongetamus, Ambatus) から、ローマ化の後もローマ化以前の、特にケルト語と関係した、印欧語起源の言語の人名を持ち続けた人々が存在したことが分かっている。また、-briga による地名は Caesarobriga, Augustobriga,

Flaviobriga などローマの人名と結びついていることなどが示すように、半島西北部ではローマ化の初期の頃まで頻繁に用いられた地名形成法であった。

碑文が示す言語状態は、ローマ化の直前のものと考えてよいだろう。残る問題はバスク語とイベリア語との関係であるが、これについては「まだ」よく分かっていないと言ふべきだろう。

イベリア語

ローマ帝政期までイベリア半島に存在した非印欧語系の言語で、1 世紀前半を最後として文字資料は途絶えているが、少なくとも 4 世紀頃までは話されていたらしい。

ケルトイベリア語

イベリア文字による碑文などを残している、ケルト語の一派。

フェニキア語

地中海東岸地域が古代ギリシア人たちが Phoinikē と呼んだ地域であるが、そのあたりから古代地中海世界全域に分布していた言語で、セム語族、北西セム語派、カナン語群に属し、紀元前 5 世紀以降のフェニキア語カルタゴ方言を、特にポエニ語と呼ぶ。数々の碑文に加え、Plautus の喜劇「カルタゴ人」(Phoenulus) にはラテン語の訳文を付けてポエニ語の会話が転写されている。

ゲルマン人の侵入

ローマ帝国の衰退に乗じてゲルマン人の侵入が始まる。

409年ゲルマンの侵入者 (Vandalos, Suevos, Alanos) がピレネー山脈を越える。ヴァンダル族は短期間にアフリカへ抜け、そこに王国をたて、またアラノ族はせん滅されてしまう。スエーヴィ族が半島西北部に定着する。後に、ゴート族が侵入し、半島を統一することになる。



・スエーヴィ族

西ゲルマンの部族で、411年にはすでに現在のガリシアとアストゥリアスのあたりに王国を築いていた。25000人くらいの集団であったといわれ(3万から4万という数字もある)、現在の Braga を首都として半島西北部を支配した。585年に西ゴート族に征服されるが一定の自治を保ちつづけたといわれる。言語的に直接の影響を見出すことは難しいが、後のガリシア・ポルトガル語のもともとの言語領域である半島西北部のあたりを2~3世紀にわたって他の地域から隔離して、固有の領域を形成したことに一定の意味を求める見解がある。

スエーヴィ語からの借用語として、次のようなものが挙げられることがある。ただし、真偽のほどは疑わしい。

laverca 「モリヒバリ」

broa (cast. borona) 「トウモロコシのパン」

britar ptg.arc. 現代語の quebrar 「こわす」

→ brita 「砂利」、britadeira, azeitona

britada

trigar ptg.arc. 「怒る」

lobio gal. 「ぶどうの木の葉」



・西ゴート族 (585~711)

507年に Toulouse を首都としていた南ガリアの王国をフランク族によって征服され、その地を追われた20万人ほどのうち、その半分くらいが半島に渡来したといわれる。当時の半島の、西ゴート族到来前の人口は7, 8万といわれている。Toledo を首都とし、585年に半島を統一する。

ゴート族は半島に到来したときに、すでにかなりローマ化された民族である上、ローマとの長い期間にわたる共存関係のため、ゴート語に起源する語彙の多くはラテン語を経由したもので、直接ゴート語からロマンス語に借用されたものは少ない。

germ. SAIPO > lat. sapone > ptg. sabão, cast. jabón, fr. savon

germ. BURGS > lat. burgus > ptg. burgo (= povoação de certa importância)

germ. WERRA > lat. guerra >> ptg. cast. it. guerra, fr. guerre

同様に

WARDON(guardar), RAUBON(roubar), HELM(elmo), DARD(dardo),

HARIBAIRGO(albergue), SAPAURA(espora), FALDA(fralda), COFEA(coifa)

SAL(sala, sá), BAN(“proibição”, lat.med. bannum > bandido, bando),

FEHU(lat.med. FEUDUM > feudo), ANDBAHTI(embaixada), TRIGGWA(trégua)

語彙の分野に一定の傾向がある。

ところが、次のものはイベリア半島にのみ見られる語彙なので、直接借用された可能性も否定できない。

SKANKJA(escanção 「宴会などでコップにワインなどを注ぐ役目の人」),

SPAIHA(espia), RAUPA(roupa), FAT(fato), LOFA(luva), SPITUS(espeto),

RUKKA(roca), GANS(ganso), GASALIA(“companheiro” > agasalhar)

GANO(gana “grande appetite, fome, ódio, má vontade)

«germanismo olvidado»

gal. escá “medida para granos” (J.L.Pensado)

gal.-ptg. agarimar “aconchegar, acarinhar”「気持ちよくする」(Piel)

ゲルマン起源の人名

Álvaro, Fernando, Afonso, Rodrigo (>Rui), Elvira, Gonçalo, Raúl

ゲルマン起源の地名は半島北部に集中している。ゴート族の王国(居住地)とは一致しないが、これは地名が土地の所有者(～の)から来ているからである。

Guimarães (< VIMARANIS: o conde portuclense, Vimara Peres)

Gondomar (< GUNDEMARI)

Sendim (< SENDINI)

イスラム教徒の侵入とレコンキスタ

711年アラブ人とマグレブのベルベル人からなるイスラム教徒が半島に侵入する。

997年 Al-Mansur によるコンポステーラの破壊

基本的には、ポルトガル側の地域で言えばドーロ川とモンデーゴ川をはさむ地域のあたりを境界とする状態が続いていた。

アラブ支配下の社会構成

- 1) os baladiyym: アラブ人で、北アフリカでも半島でも支配階級を構成した
- 2) os mouros ou bereberes da Mauritânia: アラブに征服され、部分的に
イスラム化した人々
- 3) os muwalladim: イスラムに改宗した hispano-godos で、baladiyym と同等の
地位を有し、習慣、衣服、名前、宗教、言語を変えた
- 4) os moçárabes: hispano-godos ou hispano-romanos で、イスラム支配下に
ありながら同化せず、独立し孤立した社会を構成した。
キリスト教を奉じ、ロマンス語(モサラベ語)を話していた。
- 5) os judeus: モサラベと同じ社会的地位に立つ。

モサラベ語は半島南部のロマンス語であり、比較的保守的であったといわれる。アラブ文学の中にある、当時の口語を写したと思われる短い詩(harjas)の一部がモサラベ語によるものといわれている。モサラベと呼ばれる人々が、レコンキスタの頃まで存在していたことは歴史的に知られるが、モサラベ語がレコンキスタによって北のロマンス語を話す人々が南の地域に再植民を始めたときまで残り、そこで一種の言語接触があったかどうかについては不明である。しかし、地名にはモサラベ語経由であることを示すものが、モンデーゴ川を北限とするあたりまで存在する。

Mértola <MIRTULA

Baselga < BASILICA

Molino (→ Moinho)

Madroneira (→ Madroeira)

Fontanelas (< FONTANELLAS) (→ Fontelo, Fontelas)

Arneiro (dos Marinheiros) < ARENARIU (→ Areeiro)

11世紀初めレコンキスタの開始

1064年 コインブラ

1147年 サントレン, リスボン

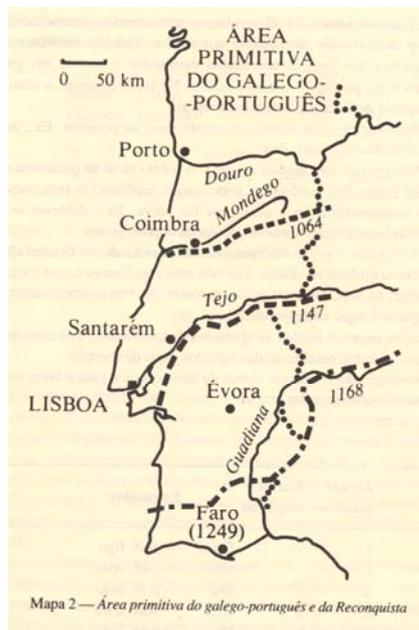
1165年 エボラ

1249年 ファーロ

(→ 1492年グラナダ)

1096年 ポルトガル伯領に Henrique

1143年 ポルトガルの独立



V. ポルトガル語の成立と初出文献

半島の南半分がイスラムの勢力によって支配されていた時代に、半島西北部に9世紀から12世紀頃にかけて、ガリシア・ポルトガル語 *galego-português* と呼んでよい言語がすでに形成されていたらしい。この言語で書かれた最初のテキスト(初出文献)が現れるのは12世紀後半(1175年)から13世紀初めである。初出文献とは、その言語で書かれた現存する最古のものである。

この言語、すなわちガリシア・ポルトガル語が分布していたもとの領域は、現代のガリシア地方とポルトガル北部のうち、東側はレオン語(方言)と接するあたりを境界として、南はドロー川とモンデーゴ川にはさまれるあたりがその限界となっていた地域であるといわれる。(特に、南側の境界が正確にどのあたりであったかということや、モサラベ語 *moçárabe* と実際に境界を接していたのか、つまり両者の領域の間はほぼ無人の地域で隔てられていたかなどの点については諸説がある。)また、ミランダのあたりは、ガリシア・ポルトガル語の分布領域ではなく、レオン語の地域であり、レコンキスタ以後、ポルトガル語が広がった地域であることにも注意しなければならない。

9世紀以降ラテン語文献のなかにポルトガル語らしき語が散見される。このようなラテン語を、*latim bárbaro*「蛮ラテン語」(*Leite de Vasconcellos* の命名)とよぶ。

abelia (< *apicula*, ← *apis*) “abelha”

conelium (< *coniculum* ← *cūnīcūlūs*) “coelho”

estrata (*strata* n.pl.) “estrada”

ovelha (< *ovicula* ← *ovis*) “ovelha”

Portugaliae Monumenta Historica (PMH) Diplomata et Chartae (882~)

Alexandre Herculano (1810~1877) によって1856年から刊行。現代から見るとエディション(活字にするにあたっての手續き)に問題があり、研究資料とするには無理があるが、初出文献以前の時代で現在まで刊行されているほとんど唯一の資料である。

Uma escritura de fundação da igreja de Lordosa (882)